「私の漆器」作文コンクール　大賞

「母に寄り添い漆器に寄せる思い」

　新年会には出かけようと思い、着物を用意している時、義母が、いてくれたらなあと、つくづく感じる。義母が、お茶を教えている時には、初釜やお茶事で新年は、にぎやかでした。嫁いで来た時、漆器の扱い方を一つ一つ教えていただいた。心をこめて作られたものだから、心をこめ、ていねいに扱うことは、もちらん、色々な願いが、込められた器であること。手には、やさしさを込めて扱っていると手になじむことも教えていただいた。そんな義母が認知症を発症してしまった。何が、義母にとって大切であるか、ずいぶん悩んだ結果、入退院、手術を経て、施設で、ケアーしていただくことにした。

　施設では、とても介護士さんが、よくしてくださり、食事の用意も見れ、おいしい香りもする。しかし、食器は無味乾燥な物でした。やはり、プラスチックで絵柄はないものでした。家で使っている食器とは、かけ離れている物でした。

　リハビリ用のものは、すくいやすい軽いもの、持ちやすいものでなければなりませんが、漆器は、ぴったりだと思う。両手つきのお湯のみ、お椀、コーヒーカップが、自然の素材でつくられていれば、絵柄が、ついていれば、どんなに喜ばれるだろう。食事が、楽しめるようなものを施設でも使ってもらえることを願っている。

　また、私が、義母の所に持ち込めるようにお菓子の小箱が、一つの絵になる、また、その一つ一つに違う絵がついていて、貝合わせのような、脳に刺激が入る、目から、楽しめる漆器が、あれば、さぞかし、義母との話がはずんで長生きしてくれるのでは、ないかと思った新年でした。願いが、かないます一年でありますよう。漆器には、不思議な力があるように思えてならない。

岡山県　N・M　女性